

幼稚園の先生と

セラピスト（心理治療者）

とはどこが違うか



遊戯を通して問題をもつ子どもを治療するセラピスト（心理治療者）は、子どもの問題を理解して治療するために、子どもに對する接しかたを研究し工夫しています。その態度は、熟達した幼稚園の先生と共通のものもあり、また違った面をもっています。幼稚園の先生も、子どもの問題を理解して、その問題をときほぐすための精神的な配慮が必要なことはいうまでもありません。それとともに教育としての機能を果さねばなりません。子どもが幼いほど

前者が重要と言えるでしょう。ここではセラピストが幼稚園の先生とどのような点で違い、どのような点で同じかを問題にしてみました。

まず、フレイ・セラピーを見学にゆきました。ある児童相談所の一室で、子どもとセラピストが二人で遊びます。その観察室から観察させていただきました。時間は約三〇分です。子どもは四歳十カ月で、一年前から毎週一回来ている男児です。二歳頃弟が生まれ、二カ月間父方の実家へ預けられ、その時から吃音がはじまったとのことです。三歳頃吃音学校へ行き、かえってひどくなり、幼稚園へ行くとき更にひどくなりました。ために相談に来られたということでした。I・Qは一〇四。セラピストのI先生は、「セラピストは子どもが幼稚な行動をしたり、奇妙な行動をしてもそれを認め、許し、そのまま受け入れます。ここへ来られるお子さんはほとんど、年令より幼い印象を与えます。おかあさん方にも、子ども

がどんなことをしてもそれを認めてもらうように話しています」と話してくださいました。

以下に少し面倒ですが、セラピストと子どもとの会話をそのままに記述して、それから、幼稚園の先生と比較して考えてみたいと思います。(ただし、読みやすいように簡明にしてあります。)

◇二・〇〇

ブレイ・セラピーのへやへ入った。C(注、Cは子ども、Tはセラピストを示す)は、へやの真ん中においてある数輛連結した汽車を動かす。汽車と一しょに床をはいずりまわる。汽車の連結がはずれる。Cはつなごうと苦心する。じつと見ていたT「こっちは出てないでしょう。」

C・どうにかつないで動かす。

T「またはずれちゃった。」

つないであげる。C・みている。

T「よいしょ、いいかな」

C「ポー・ラララ」。床を円形にはいずりまわって動かす。こしかけを動かし「すぐ、こっちへ行っちゃう」

T・ついて歩きながらみる。すわる。

C「ねえ、積木は」

T「積木? これ」と立って示す。

C・自分で積木の箱をおろす。

T「よいしょ」

C・貨車に積木を積み出す。

T・こしかけをどけてあげる すわって、

「積木汽車につむの?」

C・だまって積んでいる。

小さい声で何かいいながら積む。

◇二・〇五

T「悪いのはこっち?」

C・汽車を動かし出す。「あー」ととめる

T「とびらがひっかかりました。すわって、

C「ブーウーウー」と動かし出す。

T・立って、のび上ってみる。

C・自動車を箱の上からおろす。

C「ウーウーウー。もうこうなったらいいんだ」。右手に汽車、左手に自動車を動かす。

T「うん、そうね」

◇二・一〇

C・汽車だけ動かす。また連結がはずれ、つなぐ。立って自動車のところへもどり、「ウーウー」とはいずって自動車を汽車のところまで動かす。

T「おいこして行っちゃう」

C・汽車と自動車を動かす。積木の所まで来ると、自動車にも積木を積みながら、

「ここにも」

T「うん、ジーフにもお荷物つけるの?」

C・自動車をそっと動かす。両方動かす。積木が自動車から落ちると積む。「ああああ」

T「ああ、脱線」

C・自動車のみ動かし、長い積木を積む。

◇二・一五

T・汽車の方へ行き、さわる。また席へすわる。

「屋根の上にも、いっぱい荷物積むの、す

ごいね」

C「おっこっちゃうかな」

T「うー?」

C 「おっこっちゃうかな」(あまえた声)

T 「さあ、どうかな、おっこっちゃうかな」

C 「だいじょうぶだ」。自動車動かす。

T 「だいじょうぶね」

C 「ブーブーブーブー……」

汽車のそばまで行く

「これだけいらぬい」

積木を一個しよう。

T 「これだけはいらぬい?」

C 「しまおうかな」

T 「うん」

C ・自動車を動かし黒板の所へ行き、白墨でかく。「今シーブはここ」。線をひく

T 「うん」

C 「こう曲り角」。線をまげる。

T 「曲り角」

C 「ラララララ」と自動車を動かし「こんな
にいいばい」

T 「そうね、荷物いっぱい積んでね」

積木が落ちる。

C 「おっこっちゃった」

T 「うん」

C ・自動車をまた動かし、積木をみなおろす。

他の自動車を机の上からおろす。「ウーウーウー」といいながら、二つの自動車はいずれまわって動かす。

◇二・二〇

C 「あら、先にいっちゃった、……ウーウーウー」。

だんだん勢がよくなる。立って他の

おもちゃ箱をのぞく。

T 「○○ちゃん、おやつ時間がきちゃったから、おやつにする?」

C ・水道の方へ行く。

T 「お手々洗う?」

C 「ひとりで洗う」

T ・だまって水道の方へ立って行く。

T 「ひとりで洗いたい?」

C ・さっさと手を洗う。

T ・横で一しよに手を洗う。手拭を「はい」と渡す。

C ・手をふくと、自分でおやつのおろしき包

を持って来てはどく。(先生が用意しておいたもの)

T ・手をふきながらみている。

C ・牛乳とお菓子を出す。自分の牛乳のふた

をあけ、先生のもあけて渡す。遊ぶ時より動作がきびきびしている。

T 「どうもありがとう」

C ・お皿も渡す、「入れてあげようか」(お菓子のこと)

T 「うん、入れてくださる?」

C 「もつといっぱい?」

T 「もつといっぱいになるまで……うんと入れて……。あ、まだ袋の中に何か入っているみたいよ」

C 「これだけ?」

T 「これだけ?」

C ・牛乳をコップについて飲む。お菓子を食べ出す。顔をしかめて牛乳を飲む。

T 「うわあ、おせんべへん?」

C 「ウフッフッフ」と笑う。「また、このおせんべへん?」

T 「うん、えびせん」

C 「うん、また出て来た」。食べる。

◇二・二五

T 「えびが入ったおせんべ、うん、また出て

来たね」

C 「もう？」（先生の牛乳びんをみながら）

T 「うん、もうびんの中からっぽ」

C 「ぼくの中まだ」

T 「ここにあるけどね」（コップを指して）

C 「今ぼくの牛乳どのくらい、あーあーあるか」（ここで初めてどもる）

T 「このくらい」と手で示す。

C 「もうちょっと」

T 「このくらい」

C 「もうちょっと」

T 「このくらいかな」

C 「そう」

C ・食べる。先生の方をみながら食べる。先生も食べる。

T 「それ〇〇ちゃん大好き？」

C 「……………」

T 「これじゃがいもよ、じゃがいもって知っているでしょう」

C 「うん」

T 「じゃがいもでつくったのよ」

C ・だまって食べる。牛乳を飲む。お菓子の

袋をはらい、牛乳飲む。牛乳びんからコップ

へつぐ。「もっと、今度は？」

T 「からっぽ」

C ・飲む。

◇二・三〇

C 「ね、ぼくもう幼稚園へ行って来た」

T 「そう、ひとりで？」

C 「うん」

T 「そう」

C 「ぼく帰る」立ち上がる

T 「まだお時間あるのよ」

C 「いっばいあるの？（力を入れて）いっばいあるの？」

T 「あと五分」

C 「五分ってどれだけ？」

T 「もう少し、まだ遊んでいいのよ」

C ・どんどん入口の戸をあけて出て行く。

「まだ来ちゃだめ」

T 「まだ、だめなの？」

C 「まだ、もういいっていったら」（外へ出てどなる）

T 「そう……………もういい」（へやの中で）

C 「まだ」

T 「もういい」

C 「おいで」（外へ出てかくれる）

T 「おや、どこへ行ったのかな」

外へ出て探す。

◇二・三三

みつげられて母親に渡される。

それでは、セラビーの例や、幼稚園・保育園の例をあげながら、教師と子どもの人間関係の違いについて考えてみたいと思います。

①子どもはセラピストを友だち的にみている。

おやつの後ボーリングで遊んだ時の会話。

T 「待っててあげるわ、先生、ぼくが食べるまで」

C 「うん、先生、ボーリングして遊んでいなよ」

T 「玉はどこかな」

C 「はいよ、はいやって」玉を渡しながら。

途中から子どもも加わって一しょに遊ぶが、しばらくして子どもは、へやへ水をまき始め、

C 「先生、ボーリングしていいよ」

IT 「先生していいの？」

C 「ううん、遊びたいなら、していいよ」

T 「遊びたいなら？」

C 「よく用意するから……はい、いいよ」先生がやり出すと、子どもは水まきを続ける。

幼稚園・保育園でも、おにごっこ、ままごとなど先生と子どもが一しょに遊んでいるが、子どもは、遊び友だちというより先生という意識の方が強いように感じられる。

②幼稚園・保育園では禁止されるであろう行為が許されている。

おやつのせんべいが床に落ちていたのを、子どもがみつけ、

C 「これだれの？」

T 「あら、おとしたのでしょ？」

C 「おとさない」 足で踏んで割り出す。

T 「割りたければ割ってもいい」

C ・踏んでせんべいをこなこなにする。

T 「もっと、もっと、もっと、なくなっちゃった」

もし幼稚園・保育園だったら、「ひろいましょう」「食べるときたないからくずかごに捨てましょう」「あらあら、つぶすと床がきたなくなるでしょ？」と指導するのではないだろうか。

③幼稚園・保育園で教師が子どもを批判している例。

②と対応した場合はないが、批判されている場面を少しあげてみよう。

▽園で母親と別れる時泣く子に

「あまったれじゃおかしい。あまったれだ。

おかしい。泣く人赤ちゃんだ。あんまり泣いたら脱線しちゃう、ころんじやうよ」

▽保育室を閉めきっていたため、子どもが汗をかいていた時、

「○○ちゃんこ洗ってらっしゃい。汗っかき、汗っかき先生だものね、汗っかきの人はハンカチ持ってて、自分でふきなさいよ」

（へやをしめてあれば汗をかくのは当たり前で、子どものことを汗かきと批判するのは当

を得ない。）

▽体重測定をしながら大きくならない子に

「○○ちゃんももっと、もっと食べなきゃだめよ、つめたいものばかり飲んじゃだめよ。この前と同じ」

「おうちでごはん食べないのでしょ。お胸が小さくなったわよ」

▽はんかち、はながみ、爪の検査の時、

「○○ちゃんはながみないの？ この洋服でふくの？ きたなくなるでしょ」

「つめの長い人おにみたいよ」

▽批判してある行動を止めさせる。

「○○ちゃん、おぼうしおいしい？」

「あら、先生も足なめましようか」

「あんなにかさわつたらきたないわよ」

▽罰として子どもの喜びを取り上げる。

「お行儀の悪い人はブルへ入れないよ」

▽先生の意図にそわないための批判。

T 「おきよーおきよー、おにわのせみさん」

C 「ミーミー」

T 「元氣のないせみさんね、先生だったらミーミーとなくよ」

T 「おきよーおきよー動物園のライオンさん。おねむりしているライオンさんこわくないわ」

円形になれと言われたとき、

「そんなにくつつかないの、暑いんだから」

「先頭からっていったでしょう、この二人お

まちがえて」

おならびの時、なかなか静かにならない。

「耳がない人いますよ」

▽先生の問と違ったことを答えた時。

「今きいてないでしょう、おまちがえ朝からして」

▽製作、音感教育の時、高度のものを子どもに要求したための批判、おとなの尺度での批判。

新しい歌を教えている。

「じゃ今度アアでやりましょう。(子どもうたう)ほらきいてない証拠(うたってみせる)でたらめなら赤ちゃんでもできます。赤ちゃんに言わせてもいいです。歌になっていないでしょ。オルガンに合わせて」

「××は○○ちゃんの一番好きなお歌でしょ

う。それだのにまちがえておかしいでしょう」

でき上った製作品を批判している。

「○○ちゃん何できたの？ やねー舟？」

あんなお舟ある？ ○○ちゃんみたいたなお舟

じゃお水の中で浮かかないわよ。……あらあんな

たもできないの？

「きちんとした四角じゃないときれないので

きないのよ」

「○○ちゃんやりなおしよ。わからなかった

らききにいらっしやい」

「○○ちゃんのどれ？ ○○ちゃん太いのに

(体のこと)こんなに細い、こんなきうり食

べると栄養失調になっちゃう」

「どうしてそんなおまちがえするのでしょ、

おかしいわね、先生にきかないで、でたらめ

したらだめじゃない」(先生の指導が徹底し

なかったため、何人もまちがえていた)

▽この他三歳児に昨日の天気温度、したこ

とを話させて、人のまねをしたと言って批

判した例、話し合いの時「お盆」と、物を

運ぶ「おぼん」とを取り違えたため批判し

た例、十分以上製作の準備をしていたた

め、子どもが静かに待てないと言って批判した例などもある。

以上、望ましくない批判の例をたくさんあ

げたが、しかし、子どもの絵を

「あら、ここおもしろいわね」

「あらあなたのもいろいろなのがあるわね」

「ここおもしろい、ちゃんと考えてあるのね」

とほめている例もいくつかある。

④セラピストが、子どもの要求を理解して、

おもしろく話が發展している例。

C 「これむける、すぐくやわらかいよ」と床

に落ちていたクレヨンに紙をむき、そこにあ

る板にかき始めた。

T 「いたずらがきする」

C 「ちがう、これとんがっちゃう」

T 「ああとんがらしているの」

C 「うん、ここ穴があいているでしょう。

とんがって来た」

……………

C 「あれ、これやわらかいなあ」

もう一本のクレヨンをむく。

T 「むらさきと同じ？」

C 「ちがう。これ絶対秘密だからな」

T 「クレヨンはまだかにしたこと？」

C 「だれにも話しちゃだめだよ。ああクレヨン出てきた」(穴から出てきた)

T 「ぼくが秘密にしたみたいに、だれかかくしたのかもしれないわよ」

C 「そうだね。何か箱から出す。

「ああだれにも秘密だよ。これも秘密にしようかな」

T 「二つ秘密があるのね」

C 「これも秘密にしようかな」。何か取り出す。 T 「三つ秘密がある」

⑤幼稚園・保育園の教育的指導の例。

▽先生がままごとの人形の洋服を直している。そこへ子どもが来て、針箱の中からボタンを出して、磁石につけてみる。 T 「これはどうかしらね」とホックを出す。

T 「これは？ 安全ピンなの」と渡す。

子どもは次々に磁石につけてみる。

▽ままごと遊びで、おもちゃの洗濯機のしぼり機でお人形のスカートをしぼろうとするの

をみて T 「これは大きなもの出てくるかしら

ねー、でも出てくるのね、感心。もっと細いものがいいいわね。布の細いものがいいいわ」

布を探して持って来て「はい。じゃ。これ洗って下さいね」と渡す。

▽墨絵の書き方の指導

「ふでをまっすぐに書くところですよ。ここんどこはこんなでしょ。ほらね。こんなふででね」と先生が紙に書いてみせて筆の使い方

を説明。

▽絵をかき終って遊びに行く子に
「お仕事したあとお椅子入れてね。こうやって」と椅子を入れてみせる。

T 「ちゃんとしたの？ あなたたち」

二人の子どももしまいに行く。

T 「おやおや忘れたのね。それからお椅子もちゃんと入れて」

以上のプレイ・セラピーの記録では、セラピストのことは、殆んど子どものことばの繰返しか、子どもの行動や気持を理解して表現したものかです。またその態度は観察的、

消極的で、子どもが自由に、自発的に遊べる

環境を設定する働きが多くなっています。その中で子どもがひとり遊び、時折助けを求めたり、友だちとして話しかけたりします。

幼稚園・保育園においてもこれと同じ面がみられます。しかし、幼稚園・保育園では更に、

教師が積極的に働きかけて、遊びの方向を与えたり、遊びが更に発展するようなヒントを与えたりすること、また、ただ子どもを受け入れるというのではなく、教育的な面から子どもを批判し、建設的に指導する面があります。

この時一番気をつけなければならないのは、教育という名の下に建設的ではなく否定的・破壊的な批判をしたり、子どもの発達段階からみて高度の要求をし過ぎたための批判、教師の失敗として反省すべきことを子どもへの批判として表現してしまうことがある

ということだと思えます。そしてそれはいわゆる問題児をつくってしまう結果になりがち

です。全体的にみて現在の幼稚園・保育園に、もう少しセラピー的な面が入ってもよいのではないのでしょうか。(一)